ニューズレター雪氷北信越

No.81　2001年10月10日
(社)日本雪氷学会北信越支部発行
http://www.seppyo.org/~hse/

目次

＜報告＞
・わくわく雪・氷観察塾
・雪と氷の実験教室
・国際ワークショップ「２１世紀、最初の大雪を経験して」 基調講演と事例交流
＜その他＞
・出版物紹介
・10月、11月のカレンダー（北信越支部地域情報）

＜報告＞

わくわく雪・氷観察塾

日　時：　2001年8月4日 10:00〜12:30
場　所：　塩沢町公民館、他
主　催：　塩沢町教育委員会, (社)日本雪氷学会北信越支部
参加者：　20名
講　師：　加藤正明（長岡市立科学博物館）, 遠藤八十一（森林総研）
小林俊市・石坂雅昭・納口恭明（防災科研）, 和泉薫（新潟大・災害研）
山田高嗣（北大・低温研）, 遠藤徹・河島克久（鉄道総研）

本観察塾は，塩沢町教育委員会が町内の小学校5-6年生と中学生を対象として毎年夏休み期間中に開催している自主的な参加体験学習の場「しおざわのびのび塾」の一環として実施されたものであり，今年で3回目の開催となった。実施内容は，平松式人工雪発生装置の作製と人工雪の観察，ナダレンジャーによる模擬雪崩体験，残雪のある山の写真から雪形を創造する体験，低温体験（-30℃の体験，バナナで釘打ち），水からかき氷を作って食べる実験（過冷却実験）と盛沢山である。また，講師陣も全国各地から経験豊富な人材が多数集まり，受講生数に対する講師数の割合が充実している点も毎年の特徴である。どの体験や実験も，子供たちにとっては未知のものであり，全員，楽しみながら積極的に参加していた。残念だったのは，当日の午後に，石打丸山ジャンプ台で10万個のピンポン球雪崩実験を予定してい

たのが，早朝からの豪雨のために中止になったことである。札幌以外では初のジャンプ台を使った大規模実験であっただけに，子供達と同じぐらい講師陣もがっかりしてしまった。

（河島克久会員　記）

＜報告＞

雪と氷の実験教室

日　時：　2001 年 8 月 10 日（金）午後 1 時 30 分　4 時 30 分

会　場：　長岡雪氷防災研究所

主　催：　長岡市立科学博物館、長岡雪氷防災研究所、(社)日本雪氷学会北信越支部

参加者：　16 名

講　師：　加藤正明（長岡市立科学博物館）、小林俊市・石坂雅昭（防災科研長岡）、納口恭明（防災科研）

今夏も長岡雪氷防災研究所を会場に、標記行事を実施しました。参加者は比較的少なかったものの、平松式人工雪発生装置を使った人工雪づくり、低温体験（バナナで釘打ち）、過冷却実験、雪崩シミュレーション（ナダレンジャー等）、氷薄片の偏光板観察といった、今や定番となったメニューを楽しみました。

今回は、本部行事で使用した「雪がき認定証」（全２１項目の実験や観察に参加すると“ 雪がき ”として認定される）を譲って頂いて使用しましたが、「全項目制覇するまで“ 雪がき ”にはならない」と認定印の押捺を拒否する頼もしい子供さんもいて、講師一同、今後も教育普及に邁進することを誓いました。

（加藤正明幹事　記）

＜報告＞

国際ワークショップ「２１世紀、最初の大雪を経験して」

基調講演と事例交流

日　時：　2001 年９月 20 日(木)、21 日(金)

場　所：　長岡市立中央図書館 2 F 講堂、講座室

主　催：　防災科学技術研究所 長岡雪氷防災研究所

共　催：　新潟県、長岡市

後　援：　(社)日本雪氷学会、(社)日本雪氷学会北信越支部

参加者：　190 名(二日間延べ人数)

演題及び講師：

基調講演(1)「近年の日本の暖冬傾向を北半球の気象から考える」

中村　尚（東京大学大学院理学系研究科）

基調講演(2)「日本海降雪雲のメカニズムとその人工調節技術の現状」
村上正隆（気象研究所物理気象研究部）
海外事例紹介(1)「過去2冬期にモンゴルで発生したゾッドゥ(Dzud)災害と、
その社会経済発展に及ぼす影響」
ゲレクピル・アディアバダム（モンゴル自然環境省 気象・水文研究所）
海外事例紹介(2)「ヤクートにおける1998-2001年の河川洪水災害」
ウラディミール・ソロヴィエフ（ロシア科学アカデミー
航空・宇宙物理研究所）
国内事例紹介　口頭発表９件、パネル展示17件

国内の中村、村上二人の講師からは、それぞれ近年の日本の暖冬傾向が北半球規模の大気循環変動に伴うものであること、集中豪雪をもたらすメソ擾乱の構造・メカニズムを解明し、メソ気象モデルを用いた人工降雨・降雪技術の研究の現状についての紹介がなされた。また、海外からの二人の講師からは、モンゴルにおいて近年2冬期に起こったゾッドゥ災害により大量の家畜が失われ、カシミア産業に多大の損害を及ぼしたこと、ロシアのヤクート共和国において、今冬の厳しい寒さにより凍結した河川が、春期に増水して洪水災害をもたらしたことについての報告がなされた。特にモンゴルのゾッドゥには黒と白の二種類あり、冬の寒さや降雪による影響のみならず、夏の乾燥により家畜が餓死するという話は大変興味深かった。また、国内事例紹介では今冬の大雪の情況や各自治体の対応等について発表し、議論していただいた。口頭発表では、福井、金沢での集中的な大雪、富山での局地的な大雪についての発表等があり、パネル展示では、90分のコアタイムの間に活発なディスカッションが展開された。準備期間が短かったため、必ずしも全国の自治体からの参加が得られなかったのは残念であったが、北信越支部の会員からも大勢参加していただき、事例紹介をも担当していただいたことに対して、心から感謝いたします。

（小林俊市幹事記）

＜その他＞
＝出版物紹介＝
『雪国の視座　ゆきつもる国から』毎日新聞社
（『雪国の視座』会（委員長　樋口敬二）編、２００１年7月１５日発行、３５５頁，２,０００円（税別)、ISBN4-620-90590-9　）

本書は、(社)雪センターの設立１０周年を記念して、「雪に関わるあらゆる分野をテーマとして取り上げ、２１世紀の雪国のありかたを展望した」（あとがきより）

ものです。その内容は「雪と社会」「雪と経済」「雪と技術」「雪国の暮らし」「雪と芸術」「雪と体験・交流」「２１世紀の雪国像」の７つの章で構成され、各方面で雪に深い関心を持つ５１人が１人６ページずつ分担執筆しており、序章に編集委員長の樋口氏による「雪国における二極化」が掲載されています。

５１人の中には、支部長の小林俊一氏をはじめ、北信越支部の１１名が含まれています。写真や図が豊富で、欄外に用語解説等を入れ、ア・ラ・カルトの頁、雪国に関する年表など、工夫されています。５２の論点は、それぞれ独立していて、どこから読んでもよいものですが、雪国に関する実に豊富な視点があって、支部会員は勿論、多くの方に読んでほしい本です。

（神田健三会員　記）

＝１０月、１１月のカレンダー（北信越支部地域情報）＝

11 月 1 日（土） 2002 年 4 月 30 日（火）	『第２回雪のデザイン賞』募集開始の予定 中谷宇吉郎雪の科学館（〒922-0411 石川県加賀市潮津町イ 106 TEL:0761-75-3323）
11 月 29 日（木） 11 月 30 日（金）	第 18 回雪工学会福井大会（29 日　30 日）福井市フェニックス・プラザ（福井市田原町 1 丁目 13-6　電話：0776-20-5060） （参考：特別講演　21 世紀の気候変動—日本周辺を中心として 気象研究所佐藤康男氏（29 日午後 1 時 30 分　2 時 30 分） パネルディスカッション　21 世紀に求められる寒冷地の住宅性能 断熱機密性と健康・省エネルギー性 （29 日午後 2 時 40 分　4 時 40 分））

※『ニューズレター雪氷北信越』の配付は、郵送と電子メールで行っています。
配付方法の変更は、ニューズレター編集担当の竹井（i-takei@hokuriku-u.ac.jp または 〒920-1181 金沢市金川町ホ 3 北陸大学 竹井 巖 TEL: 076-229-6233 / FAX: 076-229-2781）で受け付けています。

※支部会員の消息欄を設けています。身近な会員の消息情報をお寄せ下さい。

※なお、次号は 2001 年 12 月 10 日発行予定です。掲載情報および原稿等は 11 月 20 日頃までに、お近くの編集委員または下記ニューズレター編集担当までお寄せください。

ニューズレター雪氷北信越

発行：（社）日本雪氷学会北信越支部事務局（石坂雅昭）

〒940-0821 長岡市栖吉町前山 187-16　防災科学技術研究所長岡雪氷防災研究所内

TEL:0258-35-7522 / FAX:0258-35-0020

編集担当：竹井　巖

〒920-1181 金沢市金川町ホ 3　北陸大学

TEL: 076-229-6233 / FAX: 076-229-2781 / e-mail: i-takei@hokuriku-u.ac.jp